

聖人鎌倉へ行く

「きた……来たぞ」

「蓮長がきたか、ここでわれわれも網をはっておるとも知らず、やって来おったか」

「今度こそは逃がすな、この間はしてやられて、うまく他領の西条に逃げられたが、今日は手捕り足捕りというところだ」

東条左衛門尉の家来十名程が、清澄山の裏路を通つて久留里に通ずる山路に見張っているのだつた。

久留里から木更津へ、これが武州へ行く順路である。聖人が清澄寺の説法で地頭の東条左衛門尉の激怒をかってから、秘かに西条華房の青蓮房に逃がれていることは、東条方でも分っていたのである。

なんとかして聖人を捕えようとする東条左衛門の苦心は、家人を四方に派して、その動勢をさぐらせておつたが、数旬の後、聖人が小湊の生家を尋ねたことが分ると、最早東条方では少しも

あわてなかった。網にかかったも同様と感じたのである。

しかし人目の多い村の中では、まさか捕えることも出来ぬので、今日の日を待っていたのである。

まさか弁々と生家にとじこもっておるまい。いずれは鎌倉にでも登るであろうから、その街道を見張っていて、人目につかぬ所でこれを亡き者にしてしまえというのが、東条左衛門の下知であつた。

そして今、四万木と黄和田畑の中間の山路に、東条の配下、十名程が物々しい支度で待ち構えていたのである。

物見をするには、究竟の山路である。時は五月の中旬、藤の花は咲き終つたが、山つつじの花が真赤に咲いて処々に百合の花が白い。

こんな荒くれ武者が、ひそんでおろうとは思えぬ静かな山道であつた。

網代笠に手甲脚絆の僧がすたすたと歩いて行くと、ばさつと矢が一本、路の真中に突きささつた。余程近い所から放つたとみえてすさまじい音であつた。

僧はすばやく路の木陰に身を寄せた。何処かで蝉の鳴く声がきこえ、木陰の木の枝に蟻の行列がせわしかつた。

しかし路の真中には依然として先刻の矢が立っているのだ。

動けば二の矢が飛んでくるに相違ない。

網代笠がゆれたのは、僧が四辺を見廻したためであろうか……。

「坊主、驚いたか」

その声と共に、二、三間先きの草むらから、ばらばらと東条の輩下が飛び出してきた。

「もう逃げられんぞ、背後をしろ」

背後にも何時の間にか四、五人並んでいた。

余り驚いた様子もなく、僧は静かな口調で、

「出家に向かつて無礼な振舞い、掟をわきまえぬか……」

「掟によつて待つていたのだ。地頭東条様の下知では仕様があるまい」

「自分は干光山清澄寺の僧侶、間違いなぞして御主人よりお叱りを受けるなよ」

「お叱言どころか、捕えて行けば御褒美が待つているのだ。但し手にあまればどのように処分し

てもよいとの殿の御命令……」

「日頃わが清澄寺に帰依の深い大檀那の東条様が、そのような無体をいう筈がない。恐らく、名を地頭に借りて不埒を致す山賊の類であろう。御覧の通り樹下石上を宿とたのむ僧形のもの、本来無一物、このままで置いてもらいたい」

「わし等だつて、満更信心気のないものでもない、坊主に頼まれてはいたし方もないが、お殿様

の命令ではそうもゆかぬ。坊さん、お前を許したのではこっちの首が危ない。泣く子と地頭には何とかいう奴、静かにしておくんさいよ」

前後から捕りかこんで押問答をしておる時、弓を下げて山の木陰から道に飛び下りて来た一人の武士、どうやら一同の采配格らしい。

「何をぐずぐずしておる。問答無用。早く縄をかけぬか」

路につき立った矢を抜きながらいい続けた。

「たった一矢で、猪なみに仕止めてもよかったが、わざと的をはずしたのだ。御慈悲と思えよ。

者ども、縄かけい！」

命令にさつと、三、四人で縄をかけた。

「蓮長、案外にたわいないではないか。清澄山の説法大高言の手前もあろう。少しは、じたばたしてもよかったのに」

縄を打つてから、網代笠の下をのぞきこんだその武士が、あつと思わず驚きの声を放った。

「こりや、義浄房殿ではないか……」

「如何にも義浄だ、お手前は長森殿……」

「こりや飛んだことをした、あわてものめ……」この方は清澄寺の義浄房殿だ。手前の日頃から親しい方、早く縄をとかぬか……」

義浄房は縄付きのまま四、五間さつと逃げ出した。

「どっこい、そうやすやすとこの縄はとかせぬぞ。長森殿、お手前はわしの寺の檀家惣代だが、日頃から武士に似合わぬあわてもの、こういう時に戒めてやらねばならぬ」

「義浄房殿、あやまる、勘弁勘弁……しても不思議だ。御房がこの道を通るとは」

「何の不思議があるうか、足があれば何処へでもゆく、今日はお経に久留里の檀家まで行くところさ」

「さては御房は、われ等の手配を知つて蓮長に代つてまぎらわしい姿で、わざわざこの路を来たものと思へる」

「そんなことこの義浄の知ることか、なつかしい弟子の蓮長は、お手前の主人から痛く叱られて、清澄の山を下つてからは、その後は消息不明だ。今日この辺でも通ると云うのなら一目でもよい会わせてくれぬか」

「おうい皆んな。早く捕かまえて義浄房殿の縄をといてくれ、勿体ないやら口惜しいやらで、あれはわしの檀那寺の和尚じゃ」

鬼ごっこでもするかのように、東条の家来達は義漁房を追いかけ始めた。皮肉なことにその義浄房が仲々つかまつてはくれないのである。その頃聖人は、兄弟子の浄頭房、義浄房のたつてのすすめに従つて、路を全く逆にとつて賀茂川を過ぎ、仁右衛門島を遙かに眺めながら江見に向か

つていたのである。さすがにこの道には、追手の影はみえなかった。かくて、和田より船形へ。

富浦の南無谷に便船を得て一路海上の旅に出たのである。

目指すは無論、鎌倉である。